

女子大学生の乳児との関わり体験 ——乳児との1回の関わりがもたらす行動・意識の変化——

阿部 淳子 (aisaka@fc.jwu.ac.jp)

宮津 寿美香・高井 清子

〔日本女子大学〕

The influence of female student's experience of contacts with an infant on their behaviour to the infant

Junko Abe ⁽¹⁾, Sumika Miyatsu ⁽²⁾, Kiyoko Takai ⁽¹⁾

⁽¹⁾ Faculty of Human Sciences and Design, Japan Women's University, Japan

⁽²⁾ Graduate School of Human Life Science, Japan Women's University, Japan

Abstract

This study examined the influence of contacts with an infant on undergraduate students' behaviours to the infant one month later. Participants were 22 female undergraduate students. They played with a boy for about 5 minutes at his 6 and 7 months of age, and asked their impressions of the contact in ten words. The frequencies of the students' behaviours (ex. patting, rocking) to the infant were significantly increased. The results of factor analysis of students' impressions indicated three factors: "perplexity", "healing", and "enjoyment". "enjoyment" increased and "perplexity" decreased at 7 months. These findings suggest students' behaviours to the infant were increased and their impressions have changed positively by contacts with the infant.

Key words

female undergraduate students, infant, experiences of contacts with an infant, experimental study, play room

1. 問題と目的

近年、児童虐待・育児不安・少子化・保育所の待機児童の増加など、子育てに関わる諸問題はますます深刻化している。中でも、親として子育てをするなかで直面する育児不安や、後を絶たない児童虐待が起こる原因は、子どもの親となるための準備として、実際に親になる前に乳幼児とふれあう機会がほとんどないことも、そのひとつとしてあげられるであろう。

そのような社会的状況をうけ、乳幼児を持つ親に対する子育て支援もさまざまな形で行われている。コミュニティが実際に育児を経験したことのある母親を専門家として雇い、気質的に扱いにくい子どもをもっている母親の相談にのったりする方法が有効であるとの報告 (Smith & Ellwood, 2011) もあり、このような取り組みは効果的であるといえよう。一方で実際に親となる前の中学生・高校生に乳児とのふれあいを体験させる事業が市町村事業として厚生労働省から提唱され、全国各地で取り組まれている。その方法はさまざまで、保育所での見学や実習、乳児検診でのふれあい体験、中学校・高校に親子を招いてのふれあい等々、市町村で取り組みは工夫されている。

この取り組みについては第46回小児保健学会でも「赤ちゃんふれあい体験学習の効果」というシンポジウムで効果の検証がなされており (石川, 2000)、アンケート調査の結果として、『赤ちゃんふれあい体験学習』は、生

徒の乳児や育児についての拒否感情を減少させ、肯定的な感情を増加させるのに効果がある」としている。

「赤ちゃんとのふれあい体験」については、母親におむつ替えや抱っこの仕方を教えてもらったり、質問したりする等、市町村や学校からの発信で、実践報告は多くなされているが、乳児との関わり方などを具体的に検討した研究論文はまだ少ない。そのような中で、乳児との接触経験とあやし行動に注目した中川・松村 (2006) の研究は興味深い。

乳児との接触経験によって、女子大学生の乳児へのあやし行動に違いがみられるかどうかについて検討した研究 (中川・松村, 2010) では、あやし行動について、乳児との接触経験がある方が、乳児への行動レパートリーが多く、乳児のぐずりも少なかったという結果が示されている。

本研究では、女子大学生が生後6カ月の乳児と関わった1回の経験が、1ヵ月を経て再試行した2回目の関わりや意識にどのような変化をもたらすかについて、次の2点から検討する。①行動レベルの変化、②意識レベルでの変化である。①行動レベルでの変化を明らかにするために、1回目と2回目の女子大学生の乳児との関わり方の変化をビデオにより分析する。また、②の意識レベルでの変化を明らかにするため、実験直後に実験参加者に対して、乳児との関わり後の意識として、大切と考えられる項目の中から10項目を選び、5段階評定で項目に対する意識の強さをチェックすることにした。また乳児との関わりについての自由記述欄も設け、実験参加者からの意見や、特に感じたことを考察の際に生かすこととした。

以上の手続きにより、本研究では乳児との関わり体験の意義と課題を探ることを目的とする。手続きの詳細については、後述する。

以下、本論文では児童福祉法での定義により、乳幼児は就学前の子ども、乳児は1歳未満児、幼児は1歳以上就学前までの子どもを指す。

2. 方法

2.1 対象児・実験参加者

2.1.1 対象児

20XX年12月28日生まれの健康な男児（以降乳児A）。第一子。父親は単身赴任中で、母親の実家で母親、祖父母、叔父と共に生活している。実験開始時の月齢は6ヵ月であった。母親に実験内容を説明し、同意書に署名して貰った。

2.1.2 実験参加者

実験内容を説明し、同意書への署名が得られた都内A大学に通う女子大学生22名（4年生1名、3年生12名、2年生9名）。ほぼ全員が子どもに関する学科に所属し、全員様々な視点から子どもについて学んでいる。

2.2 手続き

2.2.1 実験

経験を通して学生の乳児Aへの関わりに変化が見られるか否かを検討するために、実験は20XX+1年6月と同7月の2回にわたり、それぞれ3、4日に分けて1名ずつ行われた。その際、乳児Aの状態などの偏りを考慮して、参加者の順番を1回目と2回目とで入れ替えるなどの工夫をした。また途中で授乳、昼寝の時間なども入れて、乳児Aの負担を最小限にするよう配慮した。

1ヵ月の期間を空けたのは、乳児Aの各学生への慣れを避けるためである。

実験は大学のプレイルームで行われ、記録はプレイルーム内の4方に設置してある4台のカメラを用い、ワンウェイミラーで仕切られた操作室からズームおよび方向の自動遠隔操作をして撮影した。プレイルームの中には、乳児が好みそうなガラガラなど数種の玩具をマット上に置いておいた。

母親には、1回目の実験では乳児Aの心理的な安定に配慮し、終始在室して貰った。ラックに座った乳児Aから2メートルくらい離れた前方にテーブルと椅子を用意し、乳児Aに背を向け、姿は見えるがいっさい関わりを持たずに本を読むなどの行動をとるよう教示した。学生にはプレイルームに入室し、乳児Aの顔を見ながらゆっくりと近づき、座って乳児の手にそっと触れるという行動を行うよう指示し、その後は「子どもと自由に遊んで下さい」と教示しておいた。2回目は1回目終了後の学生から、母親が在室していると意識してしまうという意見が複数あったため、以下のように変えた。学生の入室前に、母親には室内の奥の方で乳児を抱いて椅子に座っていて貰い、学生が少しずつ近寄って行き最後に乳児Aの手をそっ

と触った時点で、乳児を学生に預け退室した。

1、2回目とも入室から約5分経過したところで終了とした。但し、途中で乳児Aが泣くなどして、学生の手には負えない事態が起きた時には、乳児Aの心の安定を第一に考え、また学生の負担を軽減する目的で観察は一時中断し、第一筆者が入室してあやすなどの介入を行った後、観察を続行して合計約5分となるようにした。

2.2.2 乳児と接した際の関わりに対する意識

1、2回目とも実験終了直後に、乳児Aと接した際の意識について、以下の10項目の単語に関して5段階評定でその意識の強さをチェックし、加えて自由記述により、特に感じたことや、意見を書いて貰った。

1. 楽しかった、2. 緊張した、3. 困った、4. 嬉しかった、5. 愉快だった、6. 疲れた、7. 気持ちが良かった、8. 不安だった、9. 驚いた、10. また関わりたい

2.3 分析

2.3.1 乳児への関わり行動に関して

分析開始時間は、第1回目についてはラックに座った乳児Aの手に学生が触れた後から、第2回目は母親から乳児Aを受け取った後からとした。終了時間は手続で述べたように入室から5分経った時点であるが、途中で介入が入った場合は、その前までを分析対象とした。1回目の平均分析時間は231.36秒（SD: 73.78）、2回目は237.27秒（SD: 11.10）であり、1、2回目の間に差は見られなかった（ $t(21) = -.382, n.s.$ ）。

分析は独自のチェックリストを用いて行うこととした。先行研究（中川・松村、2010）を参考に、筆者全員でビデオを視聴し、学生の関わりの中で一致して意味があると考えられた行動をあげ、整理して大きく9レパートリーに分類し、さらに細分化して全27項目のサブレパートリーを作成した（Table 1参照）。9レパートリーに沿って簡単に述べると、1. 触れる（乳児の身体の一部に）、2. パッシング（背中などを軽く叩く）、3. 立ち抱き（立った状態で縦または横に抱く）、4. 座り抱き（座った状態で抱く）、5. 揺らす、6. 笑う（乳児に笑いかける）、7. 声掛け、8. 玩具呈示（玩具を見せたり渡したり）、9. 運動（膝や床の上に立たせたり座らせたり、ジャンプさせたり）などである。両回とも出現しなかった行動はなかった。

ビデオ分析に当たっては1、2回目とも5秒を1単位とし、用意したリストで各項目の有無をチェックするという形をとった。5秒間に複数回出現した場合も1とする。学生1名のデータを3名が別個にチェックした結果、92.97%という一致率が得られたため残りは第二筆者が行った。

さらに、実験中の乳児Aの状態を把握するため、次の2点についてチェックを行った。1点は実験時間中の「泣き」の量を比較するため、学生ごとに分析時間中の泣きの時間（秒）の割合を出した。2点目は筆者全員が乳児Aの状態を、機嫌がよい：3、普通：2、機嫌が悪い：1の3段階で評定した。

Table 1 : 行動分析

レパトリー			サブ レパトリー	(人)	
	1回目	2回目		1回目	2回目
1. 触れる	22	22	a. 頭・顔	16	12
			1 b. 手足	20	13
			c. 他	22	20
2. パッティング	5	14	2 パッティング	5	14
3. 立ち抱き	4	17	3 a. 縦	3	15
			b. 横	1	4
4. 座り抱き	11	16	a. 縦	9	12
			4 b. 横	5	9
			c. 前	2	2
5. 揺らす	5	18	5 揺らす	5	18
6. 笑う	17	18	6 笑う	17	18
7. 声掛け	19	21	a. 模倣	10	15
			b. 否定	2	4
			c. 肯定	5	9
			7 d. 注意喚起・誘い	12	19
			e. 詫びる	6	5
			f. 挨拶	7	6
			g. 名前	7	8
			h. 他	15	14
8. 玩具呈示	22	19	8 玩具呈示	22	19
9. 運動	18	18	a. 立たせる (膝)	3	4
			b. 立たせる (床)	6	7
			c. ジャンプ	1	0
			9 d. 座らせる (膝)	10	13
			e. 座らせる (床)	8	10
			f. 座らせる (ラック)	11	2
			g. たかいたかい	0	1
合 計	123	163	合 計	230	273

2.3.2 乳児との関わりに対する学生の意識に関して

10項目の単語に関しては、t検定、因子分析などの統計的な処理をし、1,2回の変化の有無を分析することにした。自由記述の部分に関しては、考察などの意味づけの際参考とする。

3. 結果

実験参加者は2年生から4年生までにわたっているが、学年による顕著な差は見られなかったため、まとめて分析することにした。

3.1 実験のビデオによる行動分析

3.1.1 学生の行動レパトリーの变化

Table 1は、22名の学生全員の2回の関わりにおける各レパトリーの有無を人数で示したものである。1,2回目とも多くの学生に見られた行動は、レパトリーで見ると「1. 触れる」、「6. 笑う」、「7. 声かけ」、「8. 玩具の呈示」、「9. 運動」などであった。1回目はほとんど見られなかったのに2回目に増加したのは、「2. パッティング」($\chi^2(1) = 7.503, p < .01$)、「3. 立ち抱き」(直接確率、 $p < .001$)、「5. 揺

らす」(直接確率、 $p < .001$)であった。サブレパトリーに注目すると、「3. 立ち抱き a. 縦」(直接確率、 $p < .001$)が3名から15名に増加していることが目立つ。

個別に見ても同様のことが言えるであろうか。Figure 1は、1回目と2回目の学生たちの示した行動のレパトリー数を比較したものである。平均は1回目が10.45、2回目は12.41で、後者の方が増加していることが分かった($t(21) = -3.419, p < .01$)。個別に見ても2回目に減少したのはJ、O、Qの3名のみで、いずれも1回目におけるレパトリー数が上位5番以内の者である。因みにレパトリー数と分析対象時間との相関は1,2回目とも見られなかった(1回目: $r = .202, n.s.$ 、2回目: $r = .243, n.s.$)。このことは、時間の長短と行動のレパトリー数の多少には関係がなく、長い時間関わっても行動のレパトリーは増えるわけではないということを意味している。

3.1.2 乳児の状態の把握

実験中に乳児Aの「泣き」行動が見られた割合は、1回目の平均が29.4%に対して2回目は29.8%であり、両時期に差は見られなかった($t(21) = -.067, n.s.$)。また、乳

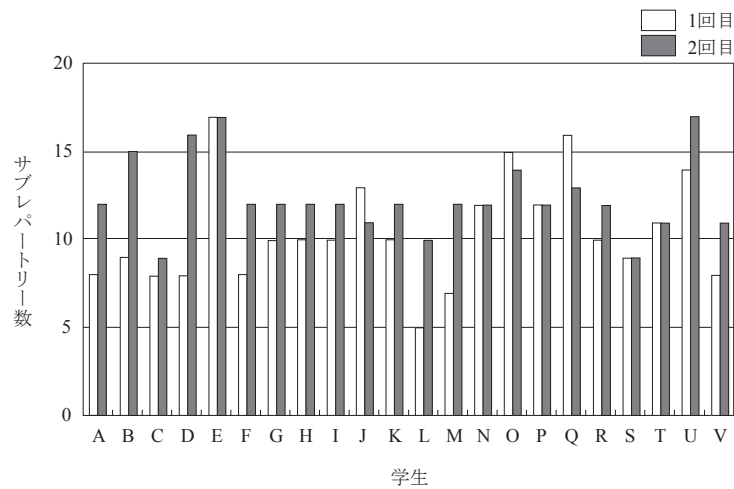


Figure 1 : サブレパトリー数の比較

児 A の状態を 3 段階で評定した結果についても、第 1 回目の平均: 1.55、第 2 回目の平均: 1.77 ($t(21) = -1.096$ *n.s.*) であり、1 回目、2 回目に差は見られなかった。

3.2 乳児との関わりに対する学生の意識の変化

3.2.1 項目の分析

Table 2 は乳児 A との関わり後の意識に関する 10 項目の単語に対して、各項目の 1 回目と 2 回目の変化の比較をしたものである。「2. 緊張した」、「3. 困った」、「5. 愉快だった」、「7. 気持ち良かった」、「8. 不安だった」の各項目について、有意な差が見られた。即ち、1 回目より 2 回目の関わりの方が「緊張」「不安」「困った」状態が低下し、「愉快」で「気持ちが良い」状態が増加したということである。

また、1 回目に行った学生の乳児 A との関わりに対する意識に関する 10 項目の単語に対して主因子法バリマックス回転により因子分析を行ったが、「6. 疲れた」で因子負荷量が .350 以下 (.307) という値であったことと、共通性が .160 以下 (.152) であったため、残りの 9 項目で

再度同様の分析を行った結果、固有値が 1 以上の 3 つの因子が抽出された (Table 3)。Cronbach の α 係数は第 I 因子 .783、第 II 因子 .708、第 III 因子 .648 であった。因子名は第 I 因子を「困惑」、第 II 因子を「癒し」、第 III 因子を「楽しみ」とした。

3.2.2 乳児との関わりに対する学生の意識の比較

Figure 2 は、因子別に 1 回目と 2 回目の意識の比較を行ったものである。それぞれの因子において t 検定を行ったところ、1 回目と 2 回目で差があったのは第 I 因子 ($t(21) = 2.421, p < .05$) と第 III 因子 ($t(21) = -2.935, p < .01$) で、第 II 因子はほぼ同じ値を示した ($Mean = 3.864, 3.863; S.D. = .172, .158$)。2 回目においては「困惑」が減少し、「楽しみ」の感情が増加し、「癒し」には変化がみられなかったということである。

4. 考察

4.1 乳児との関わり行動レパトリーの分析について

1 回目、2 回目ともに多くの学生に見られた行動につい

Table 2 : 意識の変化

	1回目(n = 22)	2回目(n = 22)	t値
1.楽しかった	4.23 (.75)	4.45 (.80)	-2.017
2.緊張した	4.32 (1.09)	3.55 (1.26)	2.854 **
3.困った	3.91 (1.27)	2.95 (1.29)	3.13 **
4.嬉しかった	4.00 (.98)	4.36 (.85)	-2.012
5.愉快だった	2.86 (1.04)	3.50 (1.37)	-2.978 **
6.疲れた	2.05 (1.21)	1.95 (1.13)	0.277
7.気持ち良かった	3.27 (.98)	3.68 (1.09)	-2.247 *
8.不安だった	3.91 (1.11)	2.86 (1.39)	2.832 **
9.驚いた	2.59 (1.40)	3.05 (1.50)	-1.096
10.また関わりたい	4.73 (.55)	4.86 (.35)	-1.821

注: ()内は標準偏差 ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3 : 1回目における学生の意識の因子分析結果

	I	II	III	共通性
3 困った	0.925	-0.174	0.104	0.896
5 愉快だった	-0.643	-0.122	0.427	0.610
8 不安だった	0.616	-0.035	-0.192	0.418
9 驚いた	0.547	-0.486	-0.143	0.556
4 嬉しかった	-0.023	0.816	0.402	0.828
7 気持ちが良かった	-0.214	0.795	0.131	0.696
2 緊張した	0.433	0.578	-0.298	0.610
1 楽しかった	-0.337	0.420	0.724	0.814
10 また関わりたい	-0.051	0.086	0.669	0.458
因子寄与	2.297	2.100	1.490	5.886
累積寄与率	25.519	48.854	65.409	

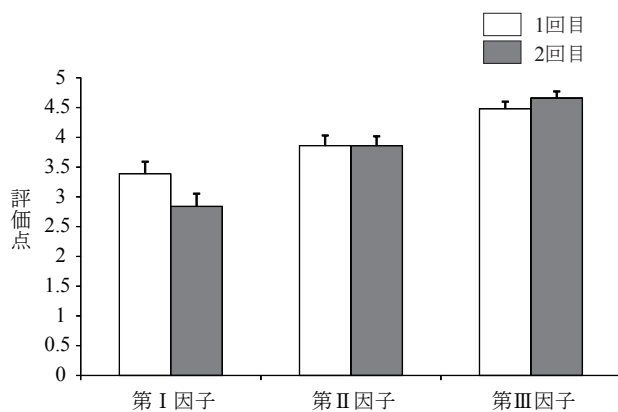


Figure 2 : 因子別比較/評価点の平均 (+ SE)

ては、「乳児の身体の一部に触れる」、「笑う」、「声かけ」、「玩具の提示」「運動」であるが、これらのことから、学生たちがまず、乳児Aの注意を自分に向け、積極的に関わろうとしていることがわかる。「声かけ」については、2回目の実験で全体的に増加傾向にあるが、その理由としては、学生が乳児との関わりへの慣れから、「模倣」や「注意喚起・誘い」という積極的な表現で応答する余裕ができたことが考えられる。乳児にとって言葉かけは重要なコミュニケーションであり (Trevvarthen, 1979)、中川・松村 (2006) の研究でも同様の行動がみられる。これらは、乳児の情動の動きを調整しようとする養育者の働きかけであるとしており、本研究においても、実験中、乳児Aが泣いたり、ぐずるなどした場面で、「はいはい」、「よしよし」などの声かけをしている学生がしばしばみられたことから、同様の行動と考えられる。

また、1回目にほとんど見られなかったが2回目は増加した行動「パッティング」「立ち縦抱き」「揺らす」については、1回目の実験では、泣いてしまった乳児Aをあやすため、約半数に第一筆者による介入があり、その際に示されたこれらの行動により、乳児Aが落ち着くのを見ていたことで学んだ可能性もある。さらに2回目であ

ることから、より大きな動きを伴うダイナミックな行動が増加したのではないかと考えられる。2回目の実験では、おむつ換え以外の目的での介入は行われていない。抱いてゆらしたり、パッティングしたりすることは、乳児をなだめる効果がある (Korner & Thoman, 1970) ことから、学生たちが1回の経験から、乳児Aに適した行動というものを選び、実践できたといえる。

1回目と2回目の行動レポーター数については、平均で増加していることがわかった。乳児のあやし行動について、乳児との接触経験が有る学生群と経験なしの学生群を比較し、経験有群の方がレポーター数が多いという中川・松村 (2010) の研究報告と同様の結果といえる。乳児Aとの関わりについて、2回目の実験において行動レポーターが増えたということは、1回であっても、経験することの意味は大きいと言えるのではないだろうか。しかしながら2回目にレポーターが増えたということについては、単純に増加することが良いとは言えず、その意味を今後精査する必要があると考える。

また、実験の2回目はいわゆる「人見知り」によって、学生に対する乳児Aの対人関係の様相は1回目より悪くなっても不思議ではなかったわけであるが、「泣き」と「評定」による比較からは両時期に差は見られないという結果となった。このことは、乳児Aが2回目にまだ人見知りの時期に至っていないという可能性もあるであろうし、学生たちの関わりが上手くなったからということも考えられるであろう。或いは2つが絡み合った結果かもしれない。この議論に関しては、2回目の実験が行われた7ヵ月前後は、それまでの対人関係に変化を見せ始め、同居している叔父に対しても時に「人見知り」のような様相を見せることがあったという母親の報告から、学生たちの関わりの変化によったとみてよいのではないかと考える。言い換えるなら、学生たちの関わり方が乳児Aを1回目と同じ位の状態に保つことができたのではないかとということである。

4.2 乳児との関わりに対する学生の意識の変化について

t検定により10項目の意識の変化の比較を行った結果では、2回目の乳児との関わりの方が「緊張」、「不安」、「困った」状態が低下したことがわかった。また、「愉快だった」と「気持ちよかった」状態は増加したことが明らかになった。また、これらの10項目の因子分析により抽出された3つの因子について、それぞれの因子においてt検定を行った結果では、2回目において「困惑」が減少し、「楽しみ」が増加した。これらのことから、2回目への取り組みの感情はポジティブに変化しているといえる。

実験後の自由記述部分においても、「1回目も2回目も乳児Aに泣かれてしまったが、2回目は泣かれてもそういうものだと思うことができた」という内容を複数の学生が書いており、2回目に関わる際に「慣れ」としてとらえられていると考えられる。

また第Ⅱ因子の「癒し」については平均値が全く変わらなかったが、これは、実験に参加した学生が子どもに関する学科に所属しており、自由記述において全員が「子どもは好きである」としていることから、「乳児と関わるのが好き」、すなわち「癒し」につながると感じていることがわかる。

5. 総合的考察

本論では約1ヵ月の間隔をおいて行った2回の実験およびそれぞれの感想の比較から、「経験」することの意義を見出そうとしたものである。しかしながら1ヵ月という短期間ではあるが、その間に2回目の実験に影響を及ぼすような体験をしていないとは言えない。そのことを念頭に置き、結果の全てを「1回の経験」に帰することなく、論を進めていかなければならないことは言うまでもない。第一筆者は本研究後に全実験参加者に対して、2回の実験の感想を含めたこれまでの乳児との関わり方の経験等についてのインタビューを行っている。そこからは、少なくとも1、2回の実験の間に特別な体験をした様子は浮かび上がって来ない(阿部, 2012)。

今回の実験が、「赤ちゃんとのふれあい体験」や家庭科の中での幼児とのふれあいと異なる点としては、母親や保育者とともに乳児に関わるのではなく、実験中、乳児と関わるのは実験に参加しているその学生だけであるという点であろう。実験では乳児Aが泣きだしてしまい、困惑した学生もいた。実際に親になる前の準備として、一人で乳児に対応するという経験ができたことは、大変意義のある経験になったと考える。

また、今回、実験に参加した学生22名のうち、15名が中学・高校生のときに、職場体験・ボランティア活動・家庭科の授業等の時間に、保育所や幼稚園で2歳から5歳の幼児と遊ぶ体験をしていたが、乳児との関わり体験はほとんどの学生が経験していないことがわかった。自分の子どもを持つ前に、補佐役としてではなく、責任をもって乳児に対応するような体験の場を設ける必要性が、今回データを分析する中で示唆されたと考える。

更に乳児と第一筆者が関わる場面を見ることにより、

その子どもにあった対応があることを学ぶことができたと考えられる。乳児と母親の観察をすることも、意味があることであろう。子どもは一人ひとり異なる個性があり、実際に親となり、子育てするときには、その子にあった関わり方を、見つけていくことが求められる。そのためにも、親になる前に乳児と関わる体験を持つことは、意味のあることであるといえよう。またその際、ただ体験、見学させるのではなく、それらをプラスの経験とするような適切なアドバイスも必要となるであろう。

今後の研究の課題としては、対象児が異なる場合にはどのような結果となるのか、検討が必要であると考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただきましたお母様、お子様、並びに実験に参加して下さった学生の皆様に心より感謝申し上げます。また、分析に当たりご協力いただいた川上清文氏(聖心女子大学)、川上文人氏(東京大学大学院教育学研究科 日本学術振興会特別研究員PD)にも御礼申し上げます。本研究は日本女子大学倫理委員会の審査を経たものであることを付記致します。

引用文献

- 阿部淳子(2012). 女子大学生の乳児との関わり体験の意義—インタビューの分析から—. 日本女子大学大学院紀要. 家政学研究科・人間生活学研究科, 18, 29-35.
- 石川清美(2000). 第46回小児保健学会シンポジウム 1. 赤ちゃんふれあい体験学習の効果 2. アンケート調査からみた効果. 小児保健研究, 59(2), 162.
- Koner, A. F., & Thoman, E. B. (1970). Visual alertness in neonates as evoked by maternal care. *Journal of Experimental Child Psychology*, 10, 67-78.
- 中川愛・松村京子(2006). 乳児との接触未経験学生のあやし行動—音声・行動分析学的研究. 発達心理学研究, 17(2), 138-147.
- 中川愛・松村京子(2010). 女子大学生における乳児へのあやし行動—乳児との接触経験による違い. 発達心理学研究, 21(2), 192-199.
- Smith, J., & Ellwood, M. (2011). Feeding patterns and emotional care in breastfed infants. *Social Indicators Research*, 101, 227-231.
- Trevarthen, C. (1979). Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In Bullowa, M. (Ed.), *Before Speech: The beginning of interpersonal communication*, 321-347. Cambridge: Cambridge University Press.

(受稿: 2012年4月2日 受理: 2012年5月29日)